

## 調査という表現 ——質的調査を伝える戦略——

小倉 康嗣

### 0. はじめに

#### 0.1 小倉・松尾『調査という表現——質的調査を伝える戦略』出版企画

\*経緯

\*目次構成案

1. 社会調査における表現の意味（小倉）
2. 社会調査の表現史（松尾）
3. リアリティを再構成する（松尾）
4. いかにかに描き、いかにかに伝えるか（小倉）
5. 作品の社会的実践性（小倉）
6. 調査を発信する戦略（松尾）

#### 0.2 今日の発表

\*上掲の目次案の4～6につながる話題を中心に（小倉担当は4～5）、拙著『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』（慶應義塾大学出版会 2006年）での経験を事例としつつ、調査から執筆、本や報告書の作成、そしてその流通について議論したい。

\*調査をよりよく表現するためのプロセスについて、自分はこうだった（こう感じて、こうした）んだけど、皆さんはどうですかといった感じで、対話的に意見交流できれば嬉しい。むしろ行間部分については、皆さんの質問に答えるかたちで報告できればと思う（ブツチャケどうだったか、遠慮なくききたいことをきいていただきたい）。NPOサーベイという「場」のめざすところ（半学半教の塾。社会調査をするひと、社会調査を受けるひと、社会調査を学ぶひと、社会調査で知りたいひと、社会調査を介して多くの人がつながることができる場）のとおり、参加者の皆さんと自由闊達なコミュニケーションができれば幸いです。

### 1. 社会調査における表現の意味

#### 1.1 社会調査の再帰性と調査表現の意味

\*科学的世界と生活世界の相互循環による世界構築。

- ・現実の共同構築性（コミュニケーションによって現実をつくりだしていく性質）がいっそう高まった時代の社会調査。
- ・社会過程に埋め込まれた社会調査。

\*それを前提とした社会調査のありようが問われてくる⇒調査表現論の重要性。

- ・「表現」は、コミュニケーションによって現実をつくりだしていく時代の調査のきわめて重要な一過程。
- ・コミュニケーション可能性を広げるための調査表現という課題。
- ・「実証から実践へ」（K・ガーゲン）。

#### 1.2 質的調査と調査表現

\*質的調査は、社会調査が社会過程に埋め込まれていること（コミュニケーションによって現実をつくりだしていくプロセス）を、生々しく突きつける。その作品化（調査表現）はいかにして可能か。

- ・ライフストーリー研究は、「研究テーマの設定（問題意識の生成）、調査する（出会う、語る、きく）、解

説・分析する（解釈する）、書く（伝える）、読む（受けとめる）」という一連の営みが、すべて社会過程そのもの（社会関係、社会的コミュニケーション、社会实践）としてあり、歴史的文化的文脈のなかに埋め込まれているということを、生々しく突きつける。ライフストーリー研究を作品化していくうえで、それをどう生かしていくか（それを生かしていくために、ライフストーリー研究をどう提示＝表現していくか）。その問いは、必然的に研究の社会的実践性をどう考えるのかという問いに連なっている。そういった問いについて、拙著を手がかりに考えてみたい。

## 2. いかに描き、いかに伝えるか

### 2.1 拙著の概要

1) 高齢化社会を人間形成のありようが根本的に問い直される「変革期」として捉え直し、そんな歴史的社会的状況のなかで人間存在と社会とのかかわり合いをどう考え、そしてその存在論的基盤をどこに求めていけばよいのか、という〈人間形成観への問い〉を、この問いのただなかにいる現代中年への足かけ7年にわたるライフストーリー調査によって追究し、理論的・方法的考察をその生成過程（調査過程論）も含めて〈経験の実践プロセス〉として作品化した。

2) 目次構成

|   |
|---|
| まえがき——〈生き方としての学問〉へ                      |
| 第一章 理論動機と認識目的——メタ理論的構図                  |
| 一 はじめに——課題意識と本書の構成                      |
| 二 歴史的社会的背景としての〈再帰的近代としての高齢化社会〉          |
| 三 「生成的理論」の構築というメタ理論的構図                  |
| 第二章 視角と方法——調査問題の構成                      |
| 一 人間形成観の問題圏へ——視角としての〈ラディカル・エイジング〉       |
| 二 生成的感受概念としての〈再帰的社会化〉と方法としての〈個人誌的アプローチ〉 |
| 三 調査問題——〈人間形成観への問い〉                     |
| 第三章 フィールドへの接近——その理論的選定と調査概要             |
| 一 現代日本における「中年の転機」                       |
| 二 〈意味感覚としての隠居〉                          |
| 三 調査概要とライフストーリーの提示の仕方（記述の文体）について        |
| 第四章 あきらめのラディカリズム——阿川さんのエイジング            |
| 一 出会い——初回調査                             |
| 二 三年ぶりの再会——再調査                          |
| 第五章 底流としての日常を生きる——馬場さんのエイジング            |
| 一 出会い——初回調査                             |
| 二 三年ぶりの再会——再調査                          |
| 第六章 いのちを信頼する——千葉さんのエイジング                |
| 一 出会い——初回調査                             |
| 二 三年半ぶりの再会——再調査                         |
| 第七章 生成された地平——ひとつの解釈として                  |
| 一 離陸する生——〈超社会化〉                         |
| 二 浮遊する生——〈非社会化〉                         |
| 三 着地をめがける生——〈再社会化〉へ                     |
| 第八章 生成としての人間形成——ひとつの結論                  |
| 一 人間生成と生成的社会——〈人間形成観への問い〉への考察と結論        |
| 二 人間生成としての調査過程——知見の生成過程の舞台裏ないし深層        |
| 三 おわりに——理論的知見と調査経験との交差点で                |
| 補論一 社会学を生きる——私に刺さった「棘」と社会学              |
| 補論二 ゲイの老後は悲惨か？——再帰的近代として的高齢化社会とゲイのエイジング |
| あとがき——「縁起」としての社会調査、「縁起」としての研究作品         |
| 資料① 初回調査の依頼状                            |
| 資料② 再調査の依頼状と同封した添付資料                    |

### 3) 調査協力者のプロフィール

\*阿川さん：初回インタビュー当時 53 歳の男性。関西出身の 1946 年生まれ。首都圏にある私立大学の工学部卒業後メーカーに就職し、30 年ほど勤めたのち、会社の早期退職制度により 52 歳で退職。現在無職で、再就職するつもりもない。2 人の子どもも独立し、関東圏の自宅に妻と 2 人で暮らしている。

\*馬場さん：初回インタビュー当時 49 歳の女性。信州の農家の家に 1949 年に生まれた。3 人兄弟の長女で、弟ひとりと妹ひとり。高校卒業後、専門学校に通って資格をとり、農業協同組合の生活指導員に。その仕事を約 20 年間していたが、職場組織そのものへの疑問と癌で倒れた義父の介護もあって、平成 3 年に辞職。現在は、農協の生活指導員をやっていた有志で平成 7 年に立ち上げた非営利組織「グリーンネット」（仮名）で、フリーコーディネーターをしている。初回インタビュー当時は廊下つづきの離れにお姑さんが住んでいた（その 2 年後に亡くなっている）が、基本的な生活は夫との 2 人暮らし生活である。社会人になった息子と、結婚した娘がおり、それぞれ独立して生活している。孫もひとり。

\*千葉さん：初回インタビュー当時 55 歳の男性。東北地方の出身で、実家は酪農を営む。東京オリンピックの年に 18 歳で上京。大学の文学部卒業後、会社に入り雑誌の編集の仕事をやっていたが、社長とぶつかって退社。その後、小さな編集プロダクションを立ち上げるも、千葉さんが手形保証人となった債務者が失踪し大きな借金を背負う。当時持っていた仕事を社員に分け、会社をたたみ、その後はひとりで仕事をしながら借金を返す生活。すでに結婚し 2 人の子どもがいたが、すさまじい借金の取立てで家族に負担をかけたくないと、40 代で離婚。もう少しで借金返済が完遂というところで脳梗塞で倒れた。初回インタビュー時の 4 カ月前のことであった。

## 2.2 拙著の方法意識と作品化（表現）への姿勢

1) 「できあがってみると、ずいぶん大部な本になってしまった。だが、いたずらに分厚くしたわけではない。それには、本書全体を通してつらぬきたいと思った学問姿勢ゆえの必然性があった。

学知（理論）が生成される学問活動の土壌は、人びとの生命経験・生活経験・人生経験の土壌と地続きであり、研究という営みは、その「地続きの土壌」において実践的に検討されていくべきものであろう。そして学問主体たる研究者も、研究者である以前に生命経験・生活経験・人生経験を持ったひとりの生活者であることに変わりはない。その意味で、学知の最終判定人は、現実を生きている生活者である。

そういった学問姿勢をつらぬこうとするとき、社会調査も、そこから引き出されてくる知見の確からしさも、この「地続きの土壌」における人間相互のかかわり合い（相互的・社会的なコミュニケーションによる相互了解）としてしか成り立たない。本書が大部なものになってしまったのは、このかかわり合いのプロセスを開示し、読者に伝えていくことで、調査研究者（著者）・調査協力者（本書に登場した現代中年）・読者相互間の「地続きの土壌」におけるコミュニケーションを図るような構成を試みたからである。」（拙著「あとがき」pp.555-6）

2) 「調査協力者の経験のなかでの生成、調査研究者の経験のなかでの生成、調査協力者と調査研究者との相互作用経験のなかでの生成、それら三重の生成のらせんが、〈再帰的近代としての高齢化社会〉という歴史的社会的状況背景を生み出され、さらにそこに読者の経験との相互作用のなかでの生成が交差していく。そのプロセスそれ自体が社会過程なのであり、相互行為過程たる研究実践のひとつの局面として社会生成の重要な回路ではないか、ということなのである。それは、K・ガーゲンの言う「研究の社会的実践性」であり、研究者自身も社会生成に参与しているメンバーであるという局面の作品化ということでもある。」（拙著「あとがき」pp.556-7）

\*これらの相互作用（対話、コミュニケーション）それ自体を社会過程として研究対象にする⇒それが作品化の仕方・作品提示の仕方に反映。

3) メタ理論としての「生成的理論」：批判的討議（対話、コミュニケーション）による了解可能な存在への接続

\*生成的理論（K・ガーゲン）…「慣習的な理解のあり方に挑み、新たな意味や行為の世界を開いてくれるような、世界についての説明」（Gergen 1999=2004: 175）。

\*「「生成的理論」においては、社会の再編期において自明視された現実を問い直す契機<sup>1</sup>を重視し、既成社会

<sup>1</sup> 本研究では、第 3 章で調査対象のフィールドとして選定される、現代日本における「中年の転機」と〈意味感覚としての隠居〉が

には存在しない、可能態としての新たな現実の存在様式（変化の兆し）に対する問いが主題となる。このような新たな存在様式は、さきにみたように「反証可能な存在」や「検証可能な存在」としてではなく、「了解可能な存在」として模索される。したがって方法論的には、「個別で特殊」であるが変化の「兆し」として「意味を担った対象」をとりだし、その「意味の解釈を通じて経験を完成させ、これを了解可能な存在に接続する」という解釈手続きを踏むことになる。

その際問題となってくるのが、解釈の「妥当性」はいかにして確保されるのか、という問題である。というのも、相互主観性にもとづく妥当性の承認がないと、解釈によって得られた知見（新たな理解と行為の様式）を「了解可能な存在」に接続できないからである<sup>2</sup>。その一方で生成的理論は、既成の常識的理解を相対化し、新たな理解と行為の様式を提供することが求められるため、たんなる常識の追認に終わってはならない。したがって、その妥当性は「批判的討議」（＝現実の社会的構成をめぐる対話と議論）に求められることになる<sup>3</sup>。その論理を今田の言説を借りて示すならば、つぎのようになる。

「（批判的討議では）解釈された言説の妥当性が提案者によって述べられ、これにたいする批判が提出されて当初の妥当性要求がテストされる。1回のテストに耐えた、あるいは修正をへた解釈が、また別の批判にさらされる。こうしたことを何度も繰り返すことによって一つの合意に達し、解釈が共通了解される。この過程を経験的テストと呼ぶことは可能である。なせなら、議論でやりとりする言説そのものが、経験的データと考えることができるからである。それらは支持データ、拒否データ、留保データのいずれかである。しかも、このデータは感覚所与とは違って、議論によって拒否や留保から支持へと移行可能なデータである。」（括弧内は小倉による）（今田 1986: 126）

以上を要するに、本研究のメタ理論的構図は、《課題に対して意味を担った対象をとりだし、その意味の解釈を通じて経験（新たな理解と行為の様式）を完成させ、これを批判的討議にのせることで了解可能な存在に接続していく》という構図になる。そして本書の主たる作業は、《意味を担った対象をとりだし、その意味の解釈を通じて経験（新たな理解と行為の様式）を完成させていく》部分までに相当する。」（拙著「第1章」pp.12-3）

## 2.3 調査過程と三重の生成のらせん

### 1) 調査過程の概要

\* 「以上のようにしてつながった調査協力者の方々に初回のインタビュー調査を行なったのは、2000年1月から7月にかけてであった。ひとりあたりのインタビュー時間は4時間から6時間。場所は、調査協力者の自宅や自宅近くの喫茶店など、調査協力者の都合のよい場所を指定してもらった。また、調査協力者には事前に電話で調査の趣旨を説明しておいた。いたって自由な非指示的インタビューであったが、「隠居」に関心を持つに至った経緯を尋ねることを最初の語りの足がかりとし、あとは調査協力者の話の流れに沿うかたちで、「生の意味」や「生きる拠りどころ」、「生きがい」、「老いと死」といった、〈人間形成観への問い〉に関連してくるであろうテーマについて問うた。

またさらに、この3人の調査協力者には、初回調査から3年ないし3年半後にあたる2003年7月から10月にかけて、再インタビュー調査を行なった。再調査の目的は、初回調査のときにききとった調査協力者それぞれのライフストーリーの個別の文脈によって、その細部は異なる（その個別の文脈における再調査の目的については、それぞれのライフストーリーが提示された章を参照されたい）。ただ、大枠を概説すれば、初回調査でききとったライフストーリーへの私なりの解釈を調査協力者にフィードバックして解釈のすり合わせを行ない、初回調査では十分には捉えきれなかった調査協力者の生き方の生成プロセスとその状況・背景についてさらなるききとりを行なう、ということが再調査の主たる目的であった。

その手続きとしては、再インタビューの依頼の手紙に、初回インタビューでききとったライフストーリー（トランスクリプト）を、私なりに重要だと感じた語りの部分に下線を引いて編集し、それを添付資料として同封し、事前にお送りしておいた（→巻末資料②を参照されたい）。そしてそれを再インタビューのとき

---

これに相当する。

<sup>2</sup> 「了解には相互主観性にもとづく妥当性の承認が含意されている」（今田 1986: 124）。

<sup>3</sup> 反証主義には演繹による「形式論理」が、検証主義には帰納による「期待値の論理」が、了解主義には解釈による「議論の論理」が、経験科学の妥当性を確保する論理ということになる（今田 1986: 122）。

の語りの足がかりとした。この添付資料をふたりでみながら解釈の相互確認を行ない、そこからさらに語り  
が展開していく場面もしばしばあり、再インタビューを深める一助となった<sup>4</sup>。」（拙著「第3章第3節」  
pp.42-3）

→「なお、各章とも第1節が初回調査（出会い）、第2節が再調査（再会）という構成になっている。初回  
調査では、もちろん私の問いかけは少なからずあるけれども、語り手である調査協力者自身の解釈をとに  
かくきく、という姿勢を重視して臨んだ。再調査では、解釈のすり合わせという目的があったため、イン  
タビューはより対話的なものとなった。したがって初回調査の記述部分と比べ、再調査の記述部分では調  
査者である私自身の発話や意図・感情が比較的多く記述されていることだろう。」（拙著「第3章第3節」  
pp.44-5）

## 2) 調査研究者の経験のなかでの生成

\* 「「私」という調査研究主体は、いかにして生成されていったのだろうか。／本書の巻末に添付した「補論  
一 社会学を生きる——私に刺さった『棘』と社会学」は、いわば調査研究主体である私自身のライフス  
トーリーである。……（中略）……私自身が社会学という学問にたどりつくまでの〈経験〉のストーリーが、  
そこに記されている。同時にそれは、私の「ゲイという経験」の、つまり私自身の「社会から外れた経験」  
のカミングアウト・ストーリーでもある。／……（中略）……／その意味で「補論一」は、本調査研究の「影  
の個人誌」であると言ってよい。この記述によって、「私」という調査研究主体がいかにして生成され、そ  
してまた、私が一連の調査研究過程にいかなる自己（経験）を持ち込んで臨んだのかがわかるであろう。す  
なわち、調査で出会った三人の現代中年とはまったく位相は異なっているけれども、私自身もまた、「棘」  
＝「社会から外れた経験」を持ち込んで調査に臨んだわけである。／また、「補論一」の原文は、2003年の  
7月から10月にかけて構想・執筆したものであり、それは本調査研究の再調査の時期と重なっている。つま  
り、再調査のプロセスのただなかで、いわば「フィールドワークの経験」（好井・桜井編、2000）が現在進  
行形で生成されていっている状況のなかで書かれたものでもある<sup>5</sup>。／「補論一」につづけて添付した「補論  
二 ゲイの老後は悲惨か？——再帰的近代としての高齢化社会とゲイのエイジング」は、私自身の経験のス  
トーリーを直接記述したものではないが、「補論一」で記したような「ゲイという経験」が、〈再帰的近代  
としての高齢化社会〉とどう交差するかを考察した小論である。調査研究する主体である「私」が、高齢化  
社会における自己の位置性（positionality）をどのように認識しているかがわかるであろう。／これらの核  
心を端的に言うならば、私は、私なりの社会から外れた経験を持ち込み、その社会から外れた地点<sup>6</sup>から〈再  
帰的近代としての高齢化社会〉における人間形成のありようを逆照射する、という位置性の自覚のもとに調  
査を開始したのだった。のちに提示するインタビュー場面にも出てくるが、〈意味感覚としての隠居〉への  
私の関心も、深層レベルにおいては私自身の社会から外れた経験から湧き出たものであったように思う。」  
（拙著「第8章第2節」pp.465-6）

「私自身はむしろその社会から外れていくことの経験の意味にこそ関心があった。」（拙著「第8章第2節」  
p.469）

・フィールドワークの道具としての調査者の自己：「自己が重要なフィールドワークの道具なのだから、フ  
ィールドワークをうまく進めるために決定的なのは、自己理解である」（パン＝マーネン）。

## 3) 調査協力者の経験のなかでの生成

\* 拙著「第4章～第6章」

---

<sup>4</sup> 実際、初回調査でききとったライフストーリーに対する私なりの解釈を調査協力者とすり合わせるという作業は、そのまま再イン  
タビューにおける「ナラティブ生成質問（generative narrative question）」（Riemann & Schutze 1987）としての役割を果たし、生成  
のプロセスと状況・背景に関するさまざまな下位文脈のストーリーを触発してくれた。

<sup>5</sup> たとえば、「補論一」の文章のなかで私が「大海原」という表現で言いあらわしているものの正体が、本章第一節の考察で明確と  
なった〈ラディカルな自然〉のことだったのだということ、私は本書を書きながら気づいた。この「気づき」も調査経験の生成プ  
ロセスの一コマであると言えるだろう。調査協力者から調査研究者の側に意味生成の主軸が移行する「作品化」の段階でも、触発さ  
れた（調査）経験の生成はつづくのである。そして私自身のエイジングのプロセスのなかで今後もつづいていくのであろう。有末賢  
が指摘する「ライフヒストリー調査のダイナミック（動的）な性格」（有末2000:20）が、ここにある。

<sup>6</sup> 本書で用いている理論的な言葉で言うならば、機能合理的な社会（近代産業社会）が強いてくる「生産性／生殖性」という人間形  
成原理から外れた地点、と言い換えてもよい。

#### 4) 調査研究者と調査協力者との相互作用経験のなかでの生成

\*ストーリー内容としては（拙著「第4章～第6章」）

- ・初回調査後3年～3年半の歳月のなかで調査研究者のなかで「発酵」してきたもの（→ライフストーリーを提示した各章の「第1節 出会い——初回調査」と「第2節 3年（or 3年半）ぶりの再会——再調査」のあいだに記述）を、再調査でぶつける。

\*コミュニケーション過程としては（拙著「第8章2節」）

##### ・阿川さん

「第4章でみたように、阿川さんはいちばん最初るとき、私のインタビューの申し出を断られた。それは、いわゆる狭義的な意味での「生涯現役」という言葉に象徴されるような従来の（機能合理的な）社会の枠組でインタビューされても、何も話すべきことはないからという理由であった（→第4章のA44～49参照）。しかし、さきにも述べたように、私自身はむしろその社会から外れていくことの経験の意味にこそ関心があった。初回インタビューをはさんだ何度かのやりとりのなかで、阿川さんは、私が暗黙裡に（「実存的に」と言い換えてもよい）持っているその関心を少しずつ感じとっていつてくださったのかもしれない。そして3年の月日を経た再インタビューのときには、実際に社会（社会文化的物語）そのもののゆらぎを阿川さん自身が身近に見聞きしていくなかで、自身の経験の意味をさらに感じとり、インタビューへの動機づけをより一層強められていったのではないか。／K・プラマーが言うように「聞き手のいない声は沈黙である」（Plummer 1995=1998: 49）。ストーリーが生成されるには、それを受け入れ支持する環境（きき手・オーディエンス、あるいは社会文化的物語）が存在するという社会的条件が必要である。その意味で、ライフストーリーの生成は社会過程そのものと再帰的な関係にある。そしてその社会的条件・社会過程の生成に、きき手である調査研究者としての私自身もまぎれもなく参与しているのである。」（拙著「第8章第2節」pp.469-70）

##### ・馬場さん

「「底流」の生き方にはモデルがない。それは、機能合理化した社会が提供する抽象的な「理念」や「役割」には収まりきらない。試行錯誤の連続であり、〈経験〉のみが頼りである。しかし、だからこそ生成の現場になりうる。馬場さんは、そんな「生き方の模索」の意味を確かめ合う機会としてインタビューに応じてくださったのだった。／そして一連の調査過程のなかで、私はたんなる調査者から、馬場さんとの〈経験〉の相互的コミュニケーションの相手になっていったのかもしれない。インタビューを介した私との対話について「無駄なことは全然してないんだよ、私は。底流のね、生き方のなかに組み込まれるよね」と馬場さんは言う。そして再インタビューが終わろうとしていたとき、つぎのように語りかけてくださったのだった。／（馬場）交流してましようよ。細々とでも（——はい）。たまたまっていうか、細々とでも、何年に1度でもいいからさ（——ええ）、交流持って（——はい）。こうやっぱり確認し合うって、あるよね。」（拙著「第8章第2節」pp.472-3）

##### ・千葉さん

「脳梗塞という病いに倒れ、身体のままならなさによって逆にみずからの身体について眼を見開かれた経験。それは千葉さんにとって、社会から外れたときに持ってくるいのちの別様な意味あいを受感する〈経験〉であった。私は、その〈経験〉の意味を模索する同行者として、そして「自分自身の海図を再構成するという経験の証人」（Frank 1995=2002: 37）として、そこに呼ばれていたのかもしれない。」

「病む身体の語りについて、自分自身の病いの経験に根ざしながら鋭敏な思索を展開するA・W・フランクは、「人々はただ自らのアイデンティティの変容を実現するためだけでなく、自らの後にしたがる他者を導くためにもまた、物語を語る」（Frank 1995=2002: 37）と言う。「物語ることの相互性の中で、語り手は自らを他者の自己形成の導きとしてさしだす。他者がその導きを受け取ることは、語り手を承認することとどまらず、価値づけることにもなる」（同上）のである。／このフランクの言う「物語ることの相互性」の場面は、まさしく〈経験〉のミメシス的ジェネラティビティの現場にほかならないであろう。第6章でもみたように、千葉さんは生かされたことを、「社会的なシステム」ではなく、「五感の届く範囲内」での「おしゃべり」で「人っていうのはこういう生き方をするんだよ」というような返し方で返していきたくて語っていた。3年半越しにわたる一連の調査過程のなかで、私は、千葉さんの言う「五感の

届く範囲内」での「おしゃべり」を通した、生かされたことを返す先のひとりになっていったのかもしれない。少なくとも私自身は、そんな千葉さんの思いをずっしりと背中に感じていたのだった」（以上、拙著「第8章第2節」pp.473-5）

・小倉（調査研究者である私）

「私自身は、社会から外れた位置性において経験し感受するものが、〈再帰的近代としての高齢化社会〉という歴史的社会的状況のなかで人間と社会を「回生」させる人間形成の新たな存在論的基盤を見出す嚆矢になるのではないか、という調査への動機づけを暗黙裡に持っていた。そしてその動機は、たしかに補論1にみるような私自身の社会から外れた個人的経験の物語によってささえられていた。しかし、インタビュー調査をはじめた当初は、その調査研究者である私自身の個人的経験の物語を調査協力者の方々に明示的にカミングアウトするつもりはなかった<sup>7</sup>。だが、再インタビューのときに、はからずもその場面はあらわれたのだった。」

「立場も属性も違う調査研究者である私と調査協力者である千葉さんをつなげていったもの。それは、社会から外れた〈経験〉だった。むろん、社会から外れた条件の経路も、「隠居」という表象に興味を持つに至った経緯もそれぞれに異なっている。だが、その個別的で多声的な〈経験〉とそこから生成されたリアリティは、〈再帰的近代としての高齢化社会〉という歴史的社会的状況を背景とする一連の調査過程のなかで、「ミメシス」的にシンクロし、つながり、私に新たな地平を見出させていったのである。／それは、阿川さんと馬場さんについても同じだった。私は、この千葉さんへの思いがけないカミングアウトによって、私の〈経験〉と千葉さんの〈経験〉が、たんなる共感というよりも、実存的な部分で暗黙裡につながっていたことの確信を持った。私はそのことに励まされて、そのあとに行なった馬場さん、阿川さんへの再インタビューでは、みずから決意してカミングアウトした。」

「この一連の調査による本研究での知見の生成過程の舞台裏には、それぞれの個別の条件は異なりながらも、調査研究者である私の社会から外れた〈経験〉と、調査協力者である阿川さん、馬場さん、千葉さんの社会から外れた〈経験〉とが間主観化されていくプロセスがあったのだろう。ただしその間主観化は、明示的な概念によってなされたものではない。むしろ出会いと再会のプロセスを含めた調査過程の時間の流れのなかで、暗黙裡になされていったように思う（その意味では「間身体化」と言ったほうがいいのかもかもしれない）。／それは、同じカテゴリーに属する当事者性だとか、交わされた言葉それ自体の同質性によるものではなく、その根っこにある「根源的な経験」を「述語面」とする〈述語的再帰性〉によって、「ミメシス媒介的」になされた共振であったと言えるのではないだろうか<sup>8</sup>。少なくとも私自身は、そのプロセスのなかで、私が社会から外れた位置性において感受してきたものが（そして調査の起点となった「隠居」という表象が）、阿川さん、馬場さん、千葉さんが「歴史」「底流としての日常」「道」「細胞の記憶」「いのち」といった言葉で照射しようとしていた〈ラディカルな自然〉に連なるものであるとい

---

<sup>7</sup> 高井葉子がフェミニスト・リサーチの論客であるM・L・ディボルトの議論（DeVault 1997）を援用して指摘するように、「社会調査論のなかで、調査者の個人的な物語は、フィールドワークそのものに織り込まれた元糸の一つである」（高井 2003: 40）。調査研究者の個人的経験は「語られる経験、語られる世界の理解や解釈の資源でもあり、同時に、他者理解の枠組みとしてとり扱うことのできない制約でもある」（同上）。しかし、「調査者の個人的経験の多くが、実は、前書きや方法論のなかで触れられてはいるものの、調査者自身は、そのことに無自覚であり、社会学的な分析スキルを自分自身の経験の分析に用いることに不慣れである……そのような形で記述された調査者の個人的な物語は、調査者の権威づけや分析の正当性を示す働きをしてはいても、調査の核心にふれるものとしては位置づけられていない」（同上）。私は、補論1に記したような私自身の個人的経験の物語（および補論2で浮き彫りになるような私の調査研究者としての位置性）が、まぎれもなく本調査研究の動機づけや解釈の資源（そして制約）となっていることへの自覚を強く持っていたが、それを調査協力者にカミングアウトすることについては躊躇していた。だが、調査協力者の方々の語りの中に背中を押されると言うべきか、一連の調査過程を経ていくなかで、はからずも＝自然（じねん）的に私の個人的経験の物語を語ることを促されていったのだった。

<sup>8</sup> その意味では、「理念的なイデオロギーの共有」ではなく「自然（じねん）的な〈経験〉のミメシス的共振」こそが、個別的で異質な世界の共約可能性を育み、そこから新たな意味地平が生成されていくのだと言えるだろう。やまだようが指摘するように、ミメシスは論理実証モードではなく物語モードによって出来事を「むすぶ」のであり、日本語で「むすぶ」は「産すぶ」を意味する。また、人間は数式（論理実証モードの原理たる論理的抽象）のまねはできないが、物語のまね（ミメシス）はしやすい（やまだ 2000: 8-11, 20-23）。その意味で〈経験〉のミメシスとは、異質性のなかにあるつながりを見出していく媒介原理となりうるものであろう。

うことに思いがけず気づかされ、私自身の生が生成されていったことは確かである<sup>9</sup>。／それは、調査研究者である私自身が再帰的に社会化<sup>10</sup>されていくプロセスであったのだろう。つまり、この一連の調査過程それ自体が〈経験〉のミメシスのジェネラティビティとしての社会化のプロセスであったのであり、〈人間生成〉のプロセスそのものであったのだ。」（以上、拙著「第8章」pp.476-89）

[ 5) 読者の経験との相互作用のなかでの生成 →次項で]

## 2.4 〈経験の実践のプロセス〉の開示：読者の経験への働きかけ

「本書では、研究知見をワンショットの「客観的事実」として提示するのではなく、研究知見を得るにいたった一連の調査研究過程を〈経験の実践のプロセス〉として赤裸々に開示し、それを「作品」化して提示するという手法をとっている。

第4章から第6章にかけて描出される、調査協力者である現代中年と調査研究者である私とのダイアログは、対話実践のなかでライフストーリーが生成されていくプロセス、相互理解が得られていくプロセス、さらには縦断的（longitudinal）な3年～3年半ごしにわたる出会い（初回調査）と再会（再調査・再々調査）のなかで互いの解釈をすり合わせていくプロセスを分厚く記述している。

そして第8章第2節と補論では、その舞台裏として、調査研究者たる「私」という主体がいかんにして立ち上がってきたかへの内省（調査研究者である私自身の経験のカミングアウト・ストーリー）を再帰的（reflexive）に織り込み、そういった調査研究者の経験（調査研究に臨む動機）と調査協力者の経験（調査に応じる動機）との相互作用場面を開示しながら、解釈や知見の生成過程の深層を探っている。

これらは、研究対象の経験と研究者自身の経験との出会いのプロセスをも含めた「〈経験の実践のプロセス〉としての調査過程」それじたいを、ひとつの社会過程として位置づけて当該研究のフィールドとし、「作品」に刻み込んでいく試みである。インタビュー（社会調査）じたいが人間生成のプロセスなのであり、そこに、調査協力者である現代中年の人びとと、調査研究者である私の再帰的な社会化のプロセスが発現しているわけである。

また、これら調査研究過程の描写をめぐるさまざまな仕掛けは一種のパフォーマンスであるともいえ、読者の経験への働きかけということも意識している。

第4章～第6章や第8章第2節の記述では、調査協力者のライフストーリーはもちろん、調査研究者である私自身の働きかけ、発話や問いかけの意図・動機、そして私自身が調査協力者の語りから感じたこと、それらも最大限露わにする記述の仕方を行なっている。そのことによって、ききとった調査協力者のライフストーリーにばかりでなく、調査研究者・調査協力者のインタビュー場面での経験の仕方にまで読者の注意を喚起し、読者の追体験を促すという意図も込められている。そして、そこで喚起される調査研究者の経験、調査協力者の経験、読者の経験のらせんによる新たな了解の生成こそが、本書のメタ理論たる「生成的理論」の要諦である、という構図になっている。

いわば、それは「劇場」なのであり、本書で上演される〈経験の実践のプロセス〉に、共感であれ、反感であれ、観客としての読者がみずからの生を重ね合わせ、自身の経験と対話することで、なんらかの意味の生成がなされんことを企図しているのである。したがって、理論的・方法論的議論に関心のない読者は、まず第3章の調査の経緯から第4章以降のインタビュー場面へと読み進んでいただいてもよい。

これらの手法は、「作品」によって読者の経験を触発することも、社会過程の一部たる学問の実践的側面として社会生成の重要な回路である、という本書の主張に基づくものであり、それは、「作品」を通じた〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ（本書の結論部である第8章で提示したタームで、経験の世代継承性のひとつのありようを概念化したもの）という実践にもつながっている。」（拙著「まえがき」pp.iii-v）

<sup>9</sup> 補論1の(3)に記した「むろん、その大海原は、ときには荒ぶる波とどこまでも深い青さに足が凍んでしまいそうな混沌たる絶海なのかもしれない。それでもいいのだ。荒波を引き受けながら、その深い青さを嗜みしめながら、畏れと歓喜のなかで素直に生きていくことができれば、それは豊かなことではないか。私の覚悟は決まった」という私の文章のくだりは、3人の調査協力者との出会いによって気づかされた（＝生成された）こと、すなわち私自身の社会から外れた経験が、〈ラディカルな自然〉たる「大海原」への〈再帰的賭け〉へと開かれていったことへの自覚をあらわしたものにほかならない。

<sup>10</sup> むろん、ここに言う「社会化」とは、本章第1節で再定義された意味での「社会化」である。

## 2.5 記述の文体（レトリック）

### 1) 「写実的物語」「告白体の物語」「印象派の物語」（バン＝マーネン）

\* 「ききとった調査協力者のライフストーリーだけではなく、調査者である私自身の働きかけ、私自身の発話や問いかけの意図・動機、そして私自身が調査協力者の語りから感じたこと、それらを最大限露わにする記述の仕方を行なっているということである。とくに調査研究者である私と調査協力者との対話については、ライフストーリーが生成される状況やプロセスがわかるように、そしてまた、のちの章で展開する私の解釈や考察の妥当性を批判的討議に開くためにも、多少冗長になってもできるかぎり切り詰めずに提示している。

J・バン＝マーネンは、エスノグラフィーを提示する際の主な文体として、「写実的物語（realist tales）」「告白体の物語（confessional tales）」「印象派の物語（impressionist tales）」の3つを挙げている（Van Maanen 1988=1999）。「写実的物語」では、著者が本質的に持っている主観は視界に入らず、「1人の著者が3人称のさめたようすでこの写実的物語を物語る」（同上: 89）。そこではテキストによって伝達される文化の再現＝表象の真正さ（解釈の全能性）が強く前面に押し出される。「告白体の物語」は、著者（フィールドワーカー）自身がフィールドワークにおいて果たした役割を（失敗も含めて）赤裸々に告白し、フィールドワーカーの視点も記述されていく。だがそこでは、人格化された著者としての権威＝著者性（オーソリティ）を強調することに主眼が置かれがちである。「印象派の物語」は「単にフィールドワークをする人やフィールドワークによって成されたことよりも、むしろフィールドワークをするという行為そのものを提示する」（同上: 175）。「当の文化にばかりでなく、フィールドワーカーのフィールドでの位置取りや経験の仕方——これこそ、フィールドワーカーが解釈すべきテキストを生産する上で有効な手段となる——にまで、読者の注意を喚起する」（同上: 202-3）わけである<sup>11</sup>。著者（フィールドワーカー）の理解や解釈はそこで完結することなく、それが正しいかどうかは、それを描き出した記述によって読者に試されるだけのことである。

次章から3章にわたって（そして部分的には第8章第2節において）ライフストーリーを提示するが、その文体が、バン＝マーネンの言う「告白体の物語」に当たるのか、それとも「印象派の物語」に当たるのかは定かではない（私自身が判断すべきことではない）が、「写実的物語」を企図したものではないことは確かである。少なくとも、調査者と調査協力者との対話そのものを最大限生かしながら、調査者である私のインタビュー場面での位置どりや経験の仕方にまで読み手の注意を喚起する提示の仕方（つまり、対話そのものを生かしたかたちでの「印象派の物語」の文体を）、私自身は意識して書いている。第8章でも言及するが、こういった記述の文体を採用するのも「生成的理論」という本研究のメタ理論的立場によるものであり、したがってそれは論理実証主義的文体とは異なるものであることを、あらかじめ断っておきたい。（拙著「第3章」pp.43-4）

### 2) 「ライフストーリーを提示する」という回答の仕方がもつ意味

\* 「ライフヒストリーを提示するという回答方法がとられるのはなぜか。それは、話者の経験した世界を最も適切に提示する方法は、話者自身の表現を通して経験された世界を示すことであると考えられるからである。したがって、「話者が経験した世界とは何であるか」という問いへの回答は、読者が話者の表現を解釈しつつ、読み進むことで引き出すべきものとされるのである。こうした方法意識から、研究者の分析・解釈は、記述と編集を通してライフヒストリーと一体化して埋め込まれてしまう。比喩的に言えば、ライフヒストリーと研究者の意図とは、刺繍の図柄とその裏に縦横無尽に交錯する糸の関係に似ている。刺繍の図柄からは糸の走り方は見えず、糸の走り方を見たからといって刺繍の図柄は見えないという表裏一体の関係になっているのである。このことは何を意味するのだろうか。／それは、経験された世界は表現され、解釈されることによるのみ現前するという研究対象と方法との密接不可分な関係についての見方を意味している。私たちはライフヒストリーの前で、「表現された世界の意味」という「経験的な対象」を如何に扱うのかという問いの前に立たされるのだと私は考える。そして、ライフヒストリー研究は、この問いに対して、事実上、

<sup>11</sup> バン＝マーネンは、「印象派の物語はフィールドワークの舞台裏の秘話なのである」（Van Maanen 1988=1999: 167）という表現もしている。本研究でのライフストーリー調査の「舞台裏の秘話」については、とくに第8章第2節でも記述することになる。

「表現と解釈」という相互の関係性の中で初めてそれは把握可能になるという回答を提起しているものと考えられる。言い換えれば、ライフストーリー研究は、話者と書き手と読者とが作品を媒介してとり結ぶ「表現と解釈」という関係性を前提にして成立する研究だと言える。したがって、この関係性を土台にして成り立つ作品は、語り方・聞き方・読み方によって表われてくる意味が変わり、それゆえに現実を問う視点そのものを流動化させる働きをもつことになる。現実あるいは現実のもつ意味は、読みを通した読者の経験の中にもみ結実する。それは、読者の現実を巻き込んで成立する知識であるがゆえに、「生々しい感動を伴う知識」（中野 1984: 87-8）ともなるのである。」（井腰 1995: 134-5）

⇒「生成的言説……既存の理解の伝統に立ち向かうと同時に、行動の新たな可能性を切り開くような言説や表現」（Gergen 1999=2004: 75）としてのライフストーリー。

## 2.6 「対研究者」と「对生活者」のはざまでのジレンマ

### 1) 二つの主張それ自体を提示しなければならない

→対研究者：こういう手法や記述の仕方を採用することの理論的・方法論的説明。知見の理論化。研究者言語による研究者コミュニティに向けてのコミュニケーションとして。

→对生活者：ライフストーリーの提示による経験の重ね合わせ、追体験の演出。生活者言語による読者の生活経験とのコミュニケーション。

\* 「いわば、それ（第4章～第6章や第8第2節の記述；小倉補足）は「劇場」なのであり、本書で上演される〈経験の実践のプロセス〉に、共感であれ、反感であれ、観客としての読者がみずからの生を重ね合わせ、自身の経験と対話することで、なんらかの意味の生成がなされんことを企図しているのである。したがって、理論的・方法論的議論に関心のない読者は、まず第三章の調査の経緯から第四章以降のインタビュー場面へと読み進んでいただいてもよい。」（拙著「まえがき」p.v）

\* 「なぜならば、そのプロセスの描出が調査協力者のライフストーリーの文脈（社会的位置づけ）を明確化するという意味を持ち、知見や解釈の妥当性や信頼性にかかわってくるからということももちろんあるが、なによりもそのプロセスを提示することで、本書の知見が読者の経験のストーリーの再構築（生成）へと開かれていくからである。だから、できるかぎり細部の息づかいを切り詰めないような記述を行なった。一方で全体性を見つめ概念化の作業を行ないながらも、他方で「魂は細部に宿る」という側面を殺したくなかったのである。」（拙著「あとがき」pp.556）

→コミュニケーションへの参加の幅の拡大と、概念化（理論化）による他の文脈への応用可能性の拡大の両立は、いかにして可能か？

### 2) しかし、両者は地続きではないか

→対研究者：研究者として読む／研究者以前のひとりの生活者として読む。

→对生活者：第1章～第2章は読み飛ばしても、第7章～第8章は伝えたい（第4章～第6章を読んだあとなら理解しうる？）。

・ 「「……まっさらなままのインディオのことばを読者に伝えるという清水さんの方法は、それ自体分りやすいし、意味はあるんだと思うんですね。だけど気にかかるのは、「ああ、彼らはそう考えるんですね」で終わってしまう危険性のことなんです。これでは、コミュニケーションとはならない。インディオのことばと自分とのギャップ、そのギャップと自分とはどう付き合っていくのかについて、清水さんも自分の言葉で喋りましょうよ。／これまで理論化を拒否しつづけてきた僕のひとつの限界を鋭くついた、彼らしいことばだ。」（清水 2004: 317）

・ 「研究を通じた社会変革——新たな現実構成——が可能であるとすれば、それはひとえに、研究者の用いる（理論）言語が、日常語の交換のみでは見えてこない現実を提示できるからである。」（永田 2004: 390）

→研究者視点を生活者言語で表現し、コミュニケーションするという課題。

\* 作品としての社会科学（内田義彦）：「思想としての滲透力」と「社会科学の用語をとり入れた日本語の創出」という問題。

・ 思想としての滲透力：「社会科学でも思想としての滲透力、心のうち深く入ってそこから働きかける力を一般の人に対してももっていなければならない」（内田 1992: 32）

- ・社会科学の用語をとり入れた日本語の創出：「社会科学を勉強してゆく一人一人が、主体として、社会科学の言葉を自分の日本語にくり入れ、日本語を——大江さんの言葉を使えば——活性化する操作をしながら意味を確かめる内面的検証もまた、同様に重要だと思うんです。こういう、言葉の側面をも、社会科学を学ぶものは、単に表現あるいは伝達の問題としてではなく、社会科学的思考そのものの成立の死活を制するものとして、まともに考えてゆかなければいけないんじゃないか。……社会科学の用語をとり入れた日本語の創出という仕事は、……社会科学を勉強する人すべて——先生と生徒、作り手と受け手をふくめていうわけで、だからまた国民のすべてと言いかえてもいいわけですけども、そのすべての人——が、一人一人、他人事ではなく自分のこととして、社会科学の用語を自分の言葉にとけこませながら社会認識の勉強をすすめてゆく、そのそう結果として自ら出来上るもの、と私は思うんです。」（内田 1992: 33-5）
- \*理論の文化的参加の文脈（⇔予測の文脈）：「科学者コミュニティにおいては鉄則とされている基準（予測力、精緻化、論理的一貫性、節約性；小倉補足）も、文化的参加の文脈ではほとんど通用しない。文化的参加の文脈で重要となるのは、予測ではなく、理解可能性を広げていくという人間科学的営みなのだ。……この文脈において最も重要なのは、様々な文化的参加を呼びかけうる人間科学的対話である。文化は、いかにして、科学の中核的命題を、自らの実践のために利用するのか？ どうすれば、科学者コミュニティを、文化の声に耳を傾ける開かれたコミュニティにすることができるのか？ 科学の中核的命題群のもつ文化的価値を探るために、どのような自省のプロセスがスタートできるだろうか？」（Gergen 1994=2004: 117）

### 3. 作品の社会的実践性

#### 3.1 「実証から実践へ」（K・ガーゲン）

##### 1) 新たな認識の産出による文化的変革

- \*「安定した状況下での理論評価の基準は、転換期におけるそれとは異なる。安定期には、社会的調整と価値の明示化を最大限実現する理論が重要視される。しかし、転換が最優先される場合には、理論家は、不合理との境界にまで接近し、自明の前提群を不安定にし、批判的かつ大胆に議論することが求められるであろう。同時に、転換への動きも、最終的には、安定化の道をたどるのである。当初、大胆であったものがありふれたものとなるにつれて、メタファーが字義通りのものとなり、可能性にすぎなかった価値が、新たな制度の中で実現し、今や通常の理論となる。以上のように、理念的には、人間についての諸科学は、安定期から、崩壊期、挑戦期、それにつづく安定期へと移行するのである。かくして、人間科学の理論は、自然を忠実になぞるものではないし、このプロセスを通して「真実」に近づいていくものでもない。そうではなくて、人間科学の理論は、文化のもつ予測力（対話への感受性；小倉補足）を拡張し、さらに、この点が最も重要なのであるが、文化の実践の可能性を拡大するのである。」（Gergen 1994=2004: 119-20）
- \*「私の考えでは、社会構成主義は、破壊的なものとしてではなく、転換への力として機能すべきである。重要なことは、言語や生の諸形式を破壊することではなく、人々が、より十分かつ前向きに協調し合うための概念的・実践的手段を提供することである。」（Gergen 1994=2004: 120）

##### 2) 研究（科学）の能動性

- \*「科学的な説明そのものに、人間活動の性質を変える潜在力が備わっているのだ。この状況は、科学者をテクノクラート（社会の測定装置；小倉補足）と見なす伝統的な視点とは、対照的である。……科学者が、自分は「単に事実を報告しているだけだ」などと表明するのは、誤りであり、ごまかしでもある。理論化が直面するのは、「この記述はどれぐらい正しいか？」という問題ではなく、「ここで選択した理論的言語は、社会の中でどのような機能を果たすのか？」という問題である。」（Gergen 1994=1998: 115）
- \*「科学者は、……移り行く世界の冷淡な傍観者でもない。科学者とは、積極的に世界に働きかけていく存在なのである。……科学者は、科学の営みそのものを通じて、価値あるものを生みだし、それを持続させていくことができるのだ。……互いが理解しえたことを表現し合うという、ごく日常的な営みこそが、科学なのだから。お互いに理解しえたことを伝達し合うこと、それは、どんなにささやかであろうとも、未来を創造するための投資なのである。」（同上: 125）

\* 「理論が価値を得るのは、他の人がその理論に同意し、その理論を採用し、さらには、その人が、当該の理論を、自らの実践の指針にまでするからである。……他者がその理論に同意し、採用するようになるのは、理論家とのコミュニケーションの結果である。このような見解が正しいとすれば、実証研究は、第一にレトリカルな道具だと見なされなくてはならない。つまり、実証研究は、理論的言語に、表現力（説得的なインパクト、魅力、表現のうまさ）を与えることができるのである。」（同上: 121）

⇒ 「客観性」「普遍性」とは、コミュニケーション可能性（了解可能性）のことでありと捉えなおせないだろうか。生成継承されていくもの（→拙著の知見として提示された〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ）としての知見。

### 3.2 〈生き方としての学問〉：〈実践的＝参与的に交流する知〉へ

#### 1) 「参与する」とは？：当事者性をどう考えるか

\* 「「いかに生きるか」という生き方の次元では、いろんなことが自分と地続きになり、誰もが当事者になる。その根っここの次元にまで降りていこう。そして、そこから立ち上がるコミュニケーション（相互了解やつながり）の可能性を見いだしていこう……たとえば「ゲイ」というカテゴリーに属するかどうかという次元では当事者じゃなくても、生きづらさや苦しみ、あるいは快や喜びの経験のなかで自らの居場所を見いだしていかにする「生き方」の次元では、誰もが当事者ではないだろうか。たとえ同じカテゴリーに属しているという意味での当事者性だとか、同一の理念を共有していなくても、存在可能に向かって懸命に生きんとする生き方の次元にまで降りていくと、そこに経験の重ね合わせの可能性が生まれ、「自分ごと」（＝当事者）として了解されてくる。そこから新たなコミュニケーションの可能性がひらけてくるかもしれない。」（小倉 2007a）

\* 「「いかに生きるか」という生き方の次元にまで降りていき、自分と地続きな関係性の網の目に「参与すること」（同上）。そのための手法。

#### 2) 〈生き方としての学問〉：「実践的＝参与的に交流する」ための知の手法として

\* 「研究者自身の生をあげてコミットメントしていくなかで生成されていく「経験」を素直に感受し、意味づけ、それを多くの人びとの経験的検証へと開いていくような知ではないだろうか。

つまり、学問主体の生（実存）それじたいをも学問のフィールドの内に入れ込み「生活世界」の相互関係へと開いていく、いわば〈生き方としての学問〉ということが問われていると思うのである。」（拙著「まえがき」p.iii）

\* 「本書で提示されたライフストーリーは、三人の現代中年の自伝（*biography*）である。ただしそれは、対話しながら他者（調査研究者である私）の自伝が入り込んで、そこから新たなストーリーが生成されていくなかでつくられていった自伝である。その意味では、本書で生成された自伝は、研究対象者の自伝と研究者自身の自伝とのコラボレーションであり、さらにそれを追体験する読者の自伝もそこにコラボレートされ、新たな経験が触発されていくことを企図している。」（拙著「あとがき」p.556）

→このような調査表現は、参与の範囲（対話の幅、コミュニケーションに参加する人びとの範囲）を広げる役割を担う。

\* 「本研究の方法論たるライフストーリー調査ないし〈個人誌的アプローチ〉という局面から言えば、ここに言う〈経験〉は、調査研究者のそれ、調査協力者のそれ、さらには読者（オーディエンス）のそれ<sup>12</sup>が、〈人間生成〉の「述語面」として連なったものとして捉えられるべきであろう。そして、そういった「述語面」からの〈述語的再帰性〉によって新たな〈経験〉が生成されてくるプロセスを、理論化の過程に組み入れていく知のあり方が問われているのではないだろうか。社会学研究者の位置性（*positionality*）ということに関しても、たんなるポリティクスのレベルにとどまらず、〈〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ〉

---

<sup>12</sup> U・フリックによれば、「テキストを読み理解することは現実を産出する積極的行為である。ここには（社会科学的）テキストの著者だけでなく、そのテキストの対象読者も含まれる。質的研究に当てはめて考えると、（ある主体、相互行為あるいは出来事に関する）テキストが作成される際、このテキストのなかの現実構築にその著者ばかりでなくそれを読み解釈する読者もかかわっている」（Flick 1995=2002: 44）。さらに、読むことの出来事性、生成性については、小森陽一が、近代日本文学における写生文の実践的可能性を見出す作業を媒介にしつつ丹念に解明している（小森 1996）。

の現場にアクチュアルに参与する実存者として、自身の〈経験〉を再帰的に入れ込んでいく方法論的構えも必要になってくると言えるであろう<sup>13</sup>。調査研究者の〈経験〉、調査協力者の〈経験〉、そして読者の〈経験〉を「述語面」とする生成に開かれていくのが「生成的理論」である。その意味では、調査研究者の〈経験〉の再帰的な開示をも含めた調査過程論の重要性は、ますます高まっていくように思われる。」(拙著「あとかぎ」p.493)

→「私の立場——私が何を考え、何を感じているか——が表明されないところに、対話はありえない」  
(Gergen 1999=2004: 234-5)

\*「第1章で述べた本研究のメタ理論的構図(「生成的理論」という立場)に立ち返るならば、本研究で得られた知見(解釈ないし理論的結論)は、決してここで完結するものではないということである。それは、新たな理解と行為の様式の一部でしかなく、新たな了解を完成(生成)していくためのたたき台のひとつを提示したにすぎない。それが了解可能な存在へと完成(生成)していくのかどうかは、本研究で行なった作業をさらに展開し蓄積しながら、それを調査研究者、調査協力者、そして本研究の読者を含めた相互主観的世界での「批判的討議」——ただし、もはやこの「批判的討議」は主知主義的な対話に限られるものではなく、詩学的な象徴的構想力を含めた〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ)にまで上げられた概念として捉え直されることになる——に委ねていくしかない。その討議(ジェネラティビティ)のプロセスにおいて、解釈が修正され、豊饒化されて、現実(生活世界)と理論(科学的世界)を含めたトータルな世界での相互主観的な妥当性が高まるかどうか、それしだいである。

本研究の知見として提出された〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ)という捉え方は、本研究の解釈や理論的結論それ自体にも当然あてはまる。J・バン＝マーネンが言うように「理論とは常に隠喩的であり、したがって、かなり不安定なもの」(Van Maanen 1988=1999: 211)である。したがって本研究の仕事はここで完結するものではない。本研究の知見は、調査研究者、調査協力者、そして本研究の読者の〈経験〉を「述語面」とする(述語的再帰性)によって「生成継承」<sup>14</sup>されていく性質のものなのである。」(拙著「第8章」pp.493-4)

#### 4. おわりに

\* 科学的世界と生活世界の相互循環のなかで構築される現実認識(社会学的認識)を、いかに充実させていくかが問われている。その充実のために、調査知見をめぐるコミュニケーション(社会や市民との対話の)可能性を高めていくこと。そこに「調査という表現」の現代的意味と実践的意義があるのではないか。

・1で社会調査の再帰性について言及したが、情報はあふれていても、それが全体(多層多元な関係性や文脈)のなかでどういう意味をもっているのかは見えづらい。情報(社会調査)のマクドナルド化。

---

<sup>13</sup> その意味では、調査研究者自身の実存(みずからの経験への了解や欲望)をも、「生成的理論」を構成するものとして俎上にのせられることになる。岡原正幸は、「研究者が客観的にことを対象化するのではなく、みずからの主観性を方法に取り込もうとしても、「それはポストモダンの思想的反省や実験的民族誌の『仲間内』では……あたかも研究者が、いかなる主題にたいしても、どこかで研究者でいられるような錯覚を覚えさせる」と指摘し、それは「みずからの主観性を研究者という集合的カテゴリーに収めるということ」にほかならないのではないかと鋭敏に問いかける(岡原 1998: 41-2)。社会学も人間の生の営みのひとつにほかならず、社会学者は研究者でもあると同時にひとりの生活者でもある。ひとりの社会学者のなかでの研究者と生活者の出会い方(と言っても、それは地続きである)を、ひとりの人間としての生涯のなかで再帰的に探究する視点も必要になってくるのではないか(その点、近代日本の社会学史をひとりの人間としての社会学者個々の生涯や人物誌に焦点をあわせて明らかにしていこうとする川合・竹村編(1998)のような試みは貴重である)。その意味では、社会学者自身のエイジング・プロセスが、研究対象者や読者のエイジング・プロセスと地続きのものとして、科学に先立つ生活世界において問われなければならないであろう。学知を〈経験〉のミメシスのジェネラティビティ)として捉えていくということは、そういった意味あいも含んでいる。

<sup>14</sup> やまだようこは「生成継承性(generativity)をもつ研究」の重要性を、自身の研究を俎上にのせながら実践的に説いている(やまだ 2002)。川合隆男が指摘するように「人間的な試みとしての社会観察・調査と学問的な試みとしての社会観察と社会調査は、ボールの両極に位置するのではなく、円環・循環の構図にある」(川合 2004: 4)。研究(学問・科学)も「人間の所産」(川合 2003: 118)であることに変わりはない。本研究の知見もまた、調査研究者の〈経験〉、調査協力者の〈経験〉、そして読者の〈経験〉を述語面とする「人間の所産」として、「生成継承」の循環に入っていくのである。

- ・コミュニケーション（対話）への参与可能性を広げるための学術的表現形態（調査表現）の模索、という課題。

\*流通まで含めての表現。

- ・「学会」という狭い世間の外に伝わりうる（コミュニケーションできる）表現のために。
- ・本の刊行にこぎつくまでの障壁。

## 文献

- 有末賢, 2000, 「生活史調査の意味論」『法学研究』73 (5):1-27.
- Frank, A.W., 1995, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics*, Chicago: University of Chicago Press. (= 2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- Gergen, K.J., 1994a, *Toward Transformation in Social Knowledge*, 2nd ed., London: Sage. (= 1998, 杉万俊夫・矢盛克也・渥美公秀訳『もう一つの社会心理学——社会行動学の転換に向けて』ナカニシヤ出版.)
- Gergen, K.J., 1994b, *Realities and Relationships: Soundings in social construction*, Cambridge: Harvard University Press. (= 2004, 永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版.)
- Gergen, K.J., 1999, *An Invitation to Social Construction*, London: Sage. (= 2004, 東村知子訳『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.)
- 井腰圭介, 1995, 「記述のレトリック——感動を伴う知識はいかにして生まれるか」中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』弘文堂, 109-36.
- 今田高俊, 1986, 『自己組織性——社会理論の復活』創文社.
- 川合隆男, 2003, 『戸田貞三——家族研究・実証社会学の軌跡』東信堂.
- 川合隆男, 2004, 『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣.
- 小林多寿子, 2007, 「書評：小倉康嗣著『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』慶應義塾大学出版会、2006年」『三田社会学』12: 125-28.
- 小森陽一, 1996, 『出来事としての読むこと』東京大学出版会.
- 永田素彦, 2004, 「訳者あとがき」K・J・ガーゲン『社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版, 387-91.
- 中野卓, 1984, 「生活史研究について」川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版, 69-88.
- 小倉康嗣, 2006, 『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』慶應義塾大学出版会.
- 小倉康嗣, 2007a, 「参与する知へ——大地に足を着けて、ただ純粋に生きていくために」(「欲望問題」出版記念プロジェクトサイト [http://www.pot.co.jp/pub\\_list/2007/04/22/review-ogura\\_yasutsugu/](http://www.pot.co.jp/pub_list/2007/04/22/review-ogura_yasutsugu/)).
- 小倉康嗣, 2007b, 「著者リブライ：『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』書評論文リブライ」『三田社会学』12: 129-33.
- 岡原正幸, 1998, 『ホモ・アフェクトス——感情社会的に自己表現する』世界思想社.
- Riemann, G. & Schutze, F., 1987, "Trajectory as a Basic Theoretical Concept for Analyzing Suffering and Disorderly Social Processes," D. Maines, ed., *Social Organization and Social Process: Essays in Honor of Anselm Strauss*. New York: Aldine de Gruyter, 333-57.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 清水透, 2004, 「開かれた歴史学へ向けて」保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房, 301-18.
- 高井葉子, 2003, 「インタビューの現象学——〈あなた〉の前にいる〈私〉の経験」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房, 21-44.
- 内田義彦, 1992, 『作品としての社会科学』岩波書店.
- 上野千鶴子, 1997, 「〈わたし〉のメタ社会学」井上俊ほか編『現代社会学1 現代社会の社会学』岩波書店, 47-82.
- Van Maanen, J., 1988, *Tales from the Field: On Writing Ethnography*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1999, 森川渉訳『フィールドワークの物語——エスノグラフィーの文章作法』現代書館.)
- やまだようこ, 2000, 「人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学」やまだようこ編『人生を物語る——生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房, 1-38.
- やまだようこ, 2002, 「なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?——質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承サイクル」『質的心理学研究』2: 70-87.
- 好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房.